

史料編

丸山家文書（銚子市東芝町丸山正治氏所蔵）

史料一

〔天明二年五月 丸山家浅間山噴火記録〕

（表紙）

天明二年
浅間山
壬寅五月

天明二壬寅五月北東風節ニ吹九月より極月迄銚子入津之廻船凡百余艘南風無之出帆不相成候、寒中雨風無之候、同三年卯春中北東吹風雨吹風雨も不旬、同七月六日朝六ツ半時分空ハ雲砂降四ツ時迄、九ツ時より天氣風一向無之、同七日朝分砂降、昼時より天氣ニ而風なし、同八日朝六ツ時より北乃方雲ベにの如し、空段々黒く五ツ時より真闇ニ相成、空も家根と相分り不申、砂ハ大降ニ成、昼時分泥雨となる、八ツ時より少々鳴人面相分らず、町々てうちんニ而大杉はやし八幡まで参詣、九日より十日迄天氣ニ相成候、家根一免砂溜りかきからうつまり候、風はけしく砂吹立往来成難事、上州・信州ハ六月廿八日より砂降り、七月七日八日殊之外浅間山又ハ其近辺大山高山焼出し砂降ことはけしく候へバ、人馬家共ニ水押死人何万人とも不相知、国々村々大麥、米相場春中分段々引上ケ、七月大麥分江戸相場諸色高直ニ相成候、それニじんじ銚子相場荒増

地廻り

玄米 壹兩二附 六斗壹式升

白米 百文二附 八合九合

九月なり

岩城米 五斗式三合

麦 壹兩二附 壹斗式三合

九月二なり

百文二附

錢相場 壹兩二付

大根壹本

瓜西瓜

小麥

舟がや 百文二付

松葉壹駄

酒伊丹壹升

新酒壹升

真木三拾六本詰 壹駄六里付

なす壹ツ

壹升位

五貫七八百文

八文九文

なし

一向なし

六り

百式拾四文

代三百七拾式文

代式百七拾式文

百式拾四文

三文四文

一、正月より八月まで壹ヶ月二天氣五六日跡ハ曇ル、又ハ雨天麦作ハ中作ニ御座候、天氣悪敷ニ附麦一向御座なく候

信州上州之川流死人利根川へ多く押流し、関宿ハ八千人余江戸川江押込銚子辺江も多く流れ来ル、同九月中仙台領不作、氣仙沼分雜石買夥敷川内へ買人遣シ元船式艘買まし、地方麦一向無之、依而村々相談致寄合名主かたへ所々買人差留、右之義ニ附広屋武左衛門ニ而麦翌日小売致、百文ニ附壹升式合より売出し、買人夥しく其日一日切ニ而相留り、二三日過て九月廿九晝夜橋本豊後屋七右衛門宅に而小売始、橋本豊後屋七右衛門宅江五ツ時に大勢ときこのゐニ而、右七右衛門方へ押掛り、門長屋表通り堀並ニ居宅相破り、町方高張ニ而大そうどう、翌日飯沼御陣屋御役人衆問屋其外雜穀買置候蔵々御吟味ニ附入ル

広屋武左衛門方ニ而十月朔日より麦小売出し候

一、御年貢五拾俵村方百姓中江御免被下置

一、同五拾俵 御未進

一、十一月十六日分又々百姓寄合致御未進再応願

一、新諸白儀上方豊作ニ附殊之外米穀諸山直代拾貳兩貳分位より段々壹升貳

百文位

一、糸綿下直百文二付三拾兩ニ相成り

秋前二ハ百文ニ附拾八兩也

一、十一月中旬銚子米段々引上り、金壹兩二付 五斗壹升

白米百文二付 八合

麦 百文二付 壹升

小麦百文二付 壹升五合

諸品高直二付

一、霜月仙台國ニ而

玄米壹兩ニ附 四斗七八升

同相馬ニ而

金壹分ニ 八升五合

南部國大不作 六升五六合

岩城大不作

金壹分ニ 七八升

一、殿様より百姓方米百俵被下内五拾俵当引并五拾俵辰年より三ヶ年賦御未進、此節名主にて組頭藤右衛門、飯沼御役所^江申出百姓方へ源左衛門・三郎

右衛門・藤兵衛・八郎左衛門・清右衛門御呼出にて百姓中へ右百俵と申大キ

二もめし軒二百拾俵と申清右衛門ニ而相済

一、町方困窮ニ而施行有之、右之出金ハ

一、金拾五兩 有田屋七右衛門

一、金拾兩 行方屋庄治郎

一、金七兩 広屋儀左衛門

一、金五兩 広屋武左衛門

一、金五兩 江戸屋文治郎

一、金五兩 広屋庄右衛門

一、金五兩 紀伊国屋太八

一、金拾兩 植田屋徳兵衛

一、金三兩 江戸屋平左衛門

一、金三兩 飯田屋久四郎

外二

一、金百兩 植田屋徳兵衛

一、金三兩 宝満寺

一、金壹兩 名主吉右衛門

一、金壹兩 組頭太郎右衛門

外二村中町々之内金銭思ひ

外二

拾六兩貳分 荒野村山台組金入場山百姓入札ニ而嘉左衛門落る

金百九拾貳兩貳分

内金七拾兩百姓中借用にて御年貢滞り之分上納

残り金百ト六兩ニ而野尻村高力米百五拾俵売施行割渡し、村家数八百五

拾壹軒、内四百四拾七軒施行、人数千三百四拾六人、米相場五斗八升也

(裏表紙)

丸山若右衛門

加瀬家文書（銚子市高神西町加瀬一男氏所蔵）

史料二

〔天保三年二月 仙台藩御穀船取落し荷物につき書簡〕（写）

仙台御穀船江戸下り当月九日常州波崎^江乗上り船其保二居附候、今日城下行
荷物取揚候節取落し并船具等迄流失仕候間、海河共^江流寄候^著見附次第早速
御廻可被致候、

（天保三年）

十二月十二日

仙台家中

信太清左衛門印

同

信太権右衛門印

波崎村々

〔史料一「諸事書留覚」より〕

永照稻荷所在石碑・棟札（銚子市新生町二丁目）

史料三

〔文化三年 佐伯氏家廟誌〕

佐伯氏家廟誌

佐伯氏其先世住豊之後州佐伯後至現洞者来于北総銚子浦而家焉初設石龕祀其
祖矣于時寛永十二乙亥歲也至天明丁未有故遷廟於後苑之側此時七世孫咸幼而
不從事家政故不知焉後常悔不得其所文化丙寅夏五月遂覆原所果宿志矣因使易
昏其梗槩於策而伝子孫以不貳其過矣咸字寧好字篤信繼祖先之業云

文化三丙寅夏六月

長門大江易謹誌

東都小島潜敬書

史料四

〔享保十九年永照稻荷棟札〕

（表）

享保十九申寅年仲春吉旦
奉造立稻荷大明神一字成就處
願主寺井七郎右衛門胤清

（裏）

下総国海上郡銚子新生邑
祠官相模守清原治通謹白

史料五

〔文化十四年永照稻荷棟札添札〕

（表）

大御屋遷祝詞
掛卷母文爾畏支 御食神受持大神農先年享保廼十余九歳止云
年廼三月尔大御屋仕奉弓自寛政廼十余二歳止云年廼十月尔外
御屋奉修理如斯奉修理弓随歷年奥津殿左右良潰破如斯在礼波
此度奉造修弓蟾蜍狹渡極天雲向伏限朝日夕日乃以照日朝風夕
風乃無喧擾日而雲無猶預不定日農吉事在礼凶事不在止弥祝尔
祝撰弓大御屋遷祝詞曰弓奉拜齋如斯奉齋弓波天長田廼大穗廼
瑞穗廼稻廼八束穗垂如種々穀物豊祁久令在勞業農弥栄尔令栄
賜陪止時波文化廼十余四歳止云年廼八月朔日神主清原阿曾美
嘉長畏美毛曰須

（裏）

願主寺井七郎右衛門宗寧

史料六

〔明治六年年永照稲荷棟札〕

(表)

明治六年歲次辛酉第四月廿日 即旧曆同月四日

奉再興 薦塚稲荷神社 一字成就之處

願主田中太平家内安全子孫長久

保立家文書 (銚子市中央町保立洋一氏所蔵)

史料七

〔寛政元年二月 金子借用証文〕 (反故)

預り申一札之事

一、金五拾毫兩式分也

元金也

内

一、金五兩也

親父死去之節入用

一、金五兩也

母人右同斷入用

一、金五兩也

右御兩人石佛代

一、金拾兩也

お市嫁入之節入用

一、金拾兩也

半兵衛家作金

右之通金子預り置申候、殘金之儀兩家之内万一不異成事故致出來候節、双方相
たん之上入用ニ可仕候、為念一札依而如件

寛政元年酉二月

酒や儀八

代 吉兵衛

本家

安兵衛殿

史料八

〔寛政三年五月 酒屋分家出入洛口証文〕

差上申洛口証文之事

一、下総国香取郡石出村百姓清兵衛方より同国海上郡銚子荒野村富田屋町叔
父清助外式々所六人相手取家督押領被致候趣、当三月中根岸肥前守様江御訴
訟申上、同四月二日御差口御裏 御尊判頂戴相附、当日双方罷出訴訟方申立
候、当拾六年已前母はつ儀、親清兵衛方江後妻ニ罷越、私儀養子ニ被黃、
親清兵衛病死後則清兵衛ニ相成百姓相統仕候處、相手之者共馴合家督押領可
致ため私ヲ奉公ニ差出、其跡ニ而清助娘きよ 桜井村幸七を婿ニ取、質地証
文帳面等迄清助方江引取、其外種々被相掠候由申立、相手方答上候、清吉
母はつを清兵衛方江後妻ニ黃請候節、男子老人有之由、清兵衛方ニ子供無
之故幸イニ存候處、右男子 先夫関戸村勘右衛門跡相統人之儀ニ付、養子ニ
御會給名主佐兵衛立入、右出入内洛為仕官御吟味御日延願上、双方江異見
差加え熟談仕候意趣、左ニ奉申上候
一、右出入双方無証擬申争之儀、扱人黃請清吉身分 清兵衛存生内之人別帳
ニも忤と徳有之由、左候ハ、全ク家督相統人ニ相違無之二付、清吉を清兵衛
と改名為致相統人ニ相定、聲幸七夫婦 分家為致、質地証文帳面等も帰村之
上取調取引仕候筈ニ而一件一同無申分、右出入内洛仕偏 御威光と雖有仕合
奉存候、然ル上 重而双方今御願ケ間敷儀決而申上間敷候、為後証連印之洛
口証文差上申所如件

寛政三亥年五月

天野三郎兵衛知行所

下総国香取郡石出村

訴訟人 百姓 清兵衛

同人母は つる

松平右京亮領分

同国海上郡銚子荒野村富田屋町

相手 清助

(四)

差添与頭 清右衛門^④

天野三郎兵衛知行所

同国香取郡石出村

名主 太郎左衛門^④

百姓 太五右衛門^④

右清助 幸七^④

升右衛門

次郎左衛門

右兩人代筆

百姓 市兵衛^④

大岡伊織知行所

同村

扱人名主 佐兵衛^④

御評定所

史料九

〔寛政三年五月 屋敷・田畑につき取替証文〕

為取替証文之事

一、名前家屋敷^者 清吉方^{江附}

一、田畑^者 不残五分宛二分ヶ

一、尤幸七住居之儀^者 清吉方成丈二家作いたし遣可申候筈

右之通相極候処相違無御坐候、以上

寛政三亥年五月

下総国香取郡石出村

清兵衛^④

御会給同村名主

扱人 儀兵衛^④

銚子荒野村富田屋町

清 助殿

史料一〇

〔寛政九年八月 家藏名前等譲渡につき請書〕（反故）

讓請申一札之事

一、私儀前年養子ニ罷成店支配仕来候処、此度加判之衆御立会之上、家藏御名前等迄御讓被下忝奉存候、右為冥加金と巷ヶ年二金子拾両宛歳々相贈可申候、為後日一札如件

寛政九年巳八月

養子 儀 八

加判

和泉屋治兵衛

代半 兵衛

広屋 伝七

宮本太右衛門

養父 安兵衛殿

史料一一

〔文化九年十二月 質地証文〕（写）

借用申質地証文之事

一、金四拾五兩也

当時通用金也

一、上田六畝壹歩

名所大木作

一、中田四畝廿三步

同

一、中田五畝廿九歩

大木へた

為此質地

一、上田五畝十五歩

同仲野上町

一、中田七畝五歩

同

一、中田壹反十四歩

下大谷

- 一、中田五畝老歩
同
一、下田四畝廿五歩
同
四反九畝廿三歩

右^著 当申御年貢御上納ニ差詰り、書面之地所書入、右之金子借用仕□□上納仕処実正也、年々義^著 金子有合ニ取定候上^著、調達次第請戻し可申候、尤長ケ年ニ不相成様出精可仕候、金子出来仕候迄^著 貴殿方ニ而御年貢諸役等御勤可被下候、万一此田地ニ付、脇合ノ違乱申者御座候ハ、請人罷出急度埒明貴殿^江 少も御難儀相掛申間敷候、為後証請人加印、依而如件

文化九申十二月日

栗野村

借主 安兵衛印

同村

請人 安右衛門印

万歳村

□右衛門殿

書面之通り相違無之候、以上

名主 傳右衛門奥印

史料二

〔文政三年五月 酒屋株出入内済証文〕

内済議定証文之事

一、先年拙者父酒屋儀八事、其地ニ而入船荷物仲買渡世仕候而、相応ニ致繁昌候処、老年ニ及吉兵衛と申者致養子候得共、此者不仕合ニ而渡世向も段々手薄ニ罷成、其上借財等相募、甚難決之折柄寛政十年年致死去候、然ル刻父儀八了簡を以、家財并二代呂物有高貸借高等微細ニ致改正貴殿養父清助方へ譲渡候儀相違無御座候、且又父儀八存生之砌^著、私方も地方過分に□致所持百姓渡世仕候得共、年々不仕合打続、当時甚困窮之身分ニ罷成り、因之無拋親族之儀ヲ以、今般貴殿之御仁情ニ預り度、猶又儀八株式之儀ニ付、先年吉

兵衛方々私方^江 入置候書付等も有之、彼是ニ付、此節直々貴殿^江 御無心之筋可申入所存ニ候処、須賀山村助右衛門と申仁、私方^江 数度被申候^著、金段之筋杯直々之欠合不宜事ニより親族の因も可破歟、清助殿実意ニより熟談も可相成由、達而異見申ニ付、差控罷在候処、今般貴殿格別之真儀を以私先祖累代之田地名所大木作・大木辺田・仲野町・下大谷、都合四ヶ所ニ而上中下田四反九畝廿三歩場所、外々^江 質地ニ書入候代金四拾五兩也、此度貴殿方ニ而請戻し、私方^江 御讓被下置候段難有仕合に奉存候、尚亦酒儀株式之儀^著 貴殿養子利助方^江 御讓被下酒儀名目相立候様、扱人一同立合之上取極、則先年吉兵衛方々入置候書付も此度相返し申候、然ル上^著 向後私方ニ何様之書付等相出候共酒清酒儀両家^江 対シ御苦難并ニ無心ケ問敷儀決而申入間敷候、為後証親類加判儀定証文依而如件

文政五年三月

栗野村

当人 安兵衛印

同村

本家 安左衛門印

須賀山村

仲人 助左衛門印

銚子荒野

酒屋 清助殿

史料三

〔文政十二年二月 酒屋清助遺言状〕

遺言之事

一、江戸南新堀和泉屋治兵衛殿、当所合諸品引合之節^著、先年合祖父儀八方合買遣致来候所、同人儀及老衰ニ在所^江 引越、尤養子吉兵衛致支配居候所、寛政十年年右吉兵衛死去致候故、店相続も相成不申ニ付、親清助并手前方^江 家蔵并江戸和泉治方買遣株式不殘被讓與候間、其砌合此方ニ而買遣致居候、

保立清助殿

且儀八店之儀、家名退去難ケ敷存、時節も候ハ、何れニ歟家名相立申度心懸居候故、養子利助ニ酒儀名目為相立候、然^者和泉治方^江買遣之儀、利助ニ讓遣可申筈杯と後來他之批判も可有之歟、併酒清方も年久敷和泉治方取引も致候得^者、對御同人^江媒酌如何敷存候故、当丑年今以來多少ニ不限注文有之候節^者不及申ニ、万端無如在平生共無油断致欠引兩家ニ而買遣可致候、此外諸宿禰買等之儀も相互ニ為知相談ヲ以万事睦敷、子孫ニ至而も中能親類因無忘却、急度相慎出精渡世可被致候、遺言依而如件

文政十二丑年二月

親清 助[㊦]

酒屋 清 助殿

右之通親清助方被下附置候間、以來相互ニ違論無之様、相慎可申候、以上

文政十二丑年二月

酒屋 儀 八[㊦]

酒屋 清 助殿

史料一四

〔明治一二年十一月 借用金証〕

借用金証

一、金三拾五円也 但通用紙幣也

此抵当大鰯網 半張

右^者今般商用ニ付、前書之金員借用仕候処確實也、御返済之義は來辰ノ二月三十日限り元利共無相違御返済可仕候、万一期限相滞候ハ、請人之我等引請抵当之網壳却仕、聊御損毛相掛申間敷候、為後念借用金証差入申処如件

明治十二年十一月七日

飯沼 邨

借用主 鶴岡 利七[㊦]

同 村

受人 座古甚兵衛[㊦]

立合人 石橋重兵衛[㊦]

荒野 邨

史料一五

〔年月日不詳 柏代金受取証文〕

記

ノ柏五拾俵 兩二五分四りん

内金八拾円也

正ニ受取

右之通り此柏正ニ預り申候、荷物儀ハ入俵次第付送り申候間如件御坐候

二月

売主 利七[㊦]
請人 藤七[㊦]

石橋重兵衛殿

武井家文書（銚子市西芝町武井年雄氏所蔵）

史料一六

〔嘉永七年九月 田畑讓渡証文〕

一札之事

一、下柴二而 畑 五畝廿五歩 四口 当地田ニ成ル

本田 彦畝拾歩

ノ五口

右^者昨年江戸屋助次郎殿より受取候内、組頭藤兵衛様御世話ニ而貴殿^江相譲り申候、然上^者御村方御水帳御書替被成、貴殿今御年貢諸役等御上納可被成候、為念書付依而如件

嘉永七寅九月

源次 郎殿

近江屋治兵衛[㊦]

御世話人

組頭 藤 兵 衛 様

威徳寺墓地墓碑(銚子市栄町四丁目)

史料一七

(宝永六年八月 信太雅楽助墓誌)

信太家先祖代々之墓

木肖孫信太氏政重法名宗圓 謹誌之

供養施主 信太権右衛門

同 清左衛門

同 次兵衛

同 喜左衛門

同 義兵衛

大光定喜墓誌銘

君姓信太氏名弘将字雅楽助生而端遠明悟與人言依於義期以德化人救家屬勸業常以仁為心而不使身囿元和中諸仙台黃門公及南部山形御城主而各賜俸且銚子口者奥州米船幅濶津而風波險惡不能直入遣番船入雅楽助掌之其楣師賜月俸年々不懈于今米船不他浦邑人以大守公之俸為門楣者皆先生之力也正保丙戌十二月廿日死壽八十六葬于当寺諡大光定喜有丈夫子五人第五子正秀法名宗鑒即予之父也嗚呼歲月磨物碑字幾滅由改修石碑表其功德欲令子孫知有王父功而不懈予拜掃也銘曰

人有細徳 前後以顯 君有茂功 前後以聞 邑人衆多 實為冠冕
隨淚事悠 予心日昃 楚波淨淨 永世不殄

寶永六巳丑年八月廿日

大里家文書(銚子市中央町大里庄治郎氏所蔵)

史料一八

(欠年欠月 大里氏九世碑銘寫書)

大里氏九世碑銘

業道正知長大人靈靈

大里養子三藏ナル者、常陸国鹿嶋郡字東下村荒波農藤城助右衛門二男ニシテ、十三歳ノ時海上郡宮城喜三郎ニ就キ從ヒ仕ヘ事ル肥料米穀ノ実業ニ勤勉辛苦スル事爰ニ九ヶ年間、明治七年十二月廿五日廿一歳ノ時大里庄次郎氏ノ養子ト成ル、大里養父ニ老母在ス、養母高妻郷ト予ト吾ノ家族ナリ、然ニ氏ノ營業トスルモノ些ニ麻草履ヲ以テ業トスル、養母ト妻ト昼夜怠慢ナク是ニ勉力スト雖、活計ハ道少乏、依テ予翌八年八月五日ヲ以テ肥料營業ヲ憤發シ年々成功、明治十五年ニ至リ殆ト利潤ヲ得業之道相就、養父代ノ負債ヲ一切消却スルコトヲ先務トシ益々利ヲ得ル不少、志願弥増シテ先代失フ処ノ地所ヲ再取戻シ家産ニ備フ、然ルニ不計モ当町内区長ニ撰擧セラレテ、止ムヲ不得土地便宜上ヲ計廢タルヲ興シ乱タルヲ治事数々、凡テ善事ヲ尽ス事ヲ精神トシテ、神社仏閣等ノ修理ニ至ル迄周旋奔走勉勵ス、素ヨリ土地産物売買上ノ利益ヲ工夫スル事ニ、又心ヲ尽シテ閑宿ニ於肥料会社ヲ設立ス、是亦盛隆ヲ成ス、廿年ヨリ廿八年ニ至ル迄家屋其他土藏建物悉皆新築造立ニ從事シ良平定怠ザルモノハ子々孫々ニ至迄家門衰滅セザルヲ希望ス、子孫予ガ多年ノ本意ヲ忘却セザラン事ヲ欲スル者ハ朝暮此碑ニ向ヒ謹テ拝礼報謝セヨ、予ガ誠心之靈此土止テ家門栄昌ヲ誓ヒ守ルニ依リ大里御氏神ノ傍ニ此碑ヲ建ル也

若宮八幡宮文書(銚子市若宮町若宮八幡神社所蔵)

史料一九

(安政四年九月 若宮八幡宮神徳狀)(寫)

村内除地に鎮座す鎮守若宮八幡宮之儀、往古より一同奉仰其神徳殊ニ古來百姓十八軒之儀ニ候御鍵前當番之節、神主一同潔斎之上社務にも相携り候旨、

古老より歴然□傳至、只今迄先例之通右宮鍵箱番相務ルニ付、月番之者御鍵前之相唱尚大貲幣帛等神前^江獻備仕候^ニ付、御焚前よも相唱、毎月式日臨時諸祭事に神主新生村宮内主水殿社務に節賄に相務、右宮社破損之砌時々修理相加、延享年中當時宮社再興之節、右百姓一同^{ツマ}推丹誠普請出來之節、主水殿より納置候棟札ニも右百姓之内姓名書載有之連綿御鍵前相務、其後右之内移転之家者分家親類ニ而相務、當時之儀ニ左ニ連署致し候六軒ニ而目出度相務、去嘉永年中本社銅瓦再興之節、是又古百姓相始メ一同信心を以無滞出來致候、右ニ付てハ古來之規模後世子孫忘却無之為メ、今般神主立会相談之上、右記録相調帳面相認神鍵箱^江納置申者也、就而ハ一同古格相当疎略無之様仕愈可奉仰御神德状、依如件

安政四丁巳年九月

今宮村古來百姓當時名主役

五木田三郎左衛門印

同 同

當時組頭

山口三郎左衛門事

重三郎印

同 同

當時組頭

宮内與三左衛門事

寅之助印

同 同

白石五郎右衛門印

同 同

宮内治郎兵衛印

塚本四郎兵衛更統

同 同

宮内嘉兵衛印

前書之通拙者立会相調候処相違無之候、以上

宮内主水印

(史料一九 「鎮守御鍵前帳」、『若宮八幡宮神社誌』より)

史料二〇

〔欠年欠月 八幡宮御鍵箱裏書〕

天正三年

八月十五月初日

与兵衛 ○

五郎右衛門

甚左衛門

与惣右衛門

与惣左衛門

三郎左衛門

清左衛門 ○

三郎左衛門

与右衛門

甚之丞

藤兵衛 ○

ノ十一人

青野家文書(銚子市浜町青野忠正氏所蔵)

史料二一

〔明治二〇年二月 借地敷金証文〕

差入証

一、明治十三年十二月中御亡父儀兵衛殿^江金三拾円也敷金致置候処、此度地代金五円也不納有之ニ付、右金円差引文ニ金貳拾五円之証文取申候、依テ元敷金三拾円之証文我等所持候へ共、以來反古タルベク候也、為後日差入証如件

明治廿年二月九日

飯沼村浜町

浜 仲 伴 七^④

青 野 忠 八殿

史料二二

(明治二〇年二月 借地敷金預証) (案)

敷金預証

一、金貳拾五円

但シ無利足

右^者我等所有之宅地飯沼村浜町貳百貳拾貳番貳畝貳三歩之内拾七坪半貸与候ニ付敷金トシテ前額金、円請取置候処確実也、右地所明渡候節ハ速ニ相戻シ可申候、且又貸与中地代金不納等有候ハ、前段敷金之内ニテ差引勘定可仕候、為後敷金預書如件

明治廿年二月九日

地主

青 野 忠 八

浜 仲 伴 七殿

石上家文書(銚子市田中町石上藤太氏所蔵)

史料二三

(明治二七年九月 所有不動産調書) (控)

所有不動産調書

千葉県海上郡本銚子町貳百四拾九番地字田中町

一、宅地九畝貳拾壹歩

此地価金五拾三円三拾五錢

此地租金壹円三拾三錢四厘

此売買見積価格貳百四拾七円三十五錢

千葉県海上郡本銚子町貳百四拾八番地字同

一、宅地壹畝七歩

此地価金四円九拾三錢三厘

此地租金拾二錢三厘

此売買見積価格三拾壹円四拾五錢

同県同郡同町貳百四拾七番地字同

一、宅地貳畝五歩

此地価金八円六十六錢七厘

此地租金貳拾壹錢六厘

此売買見積価格五拾五円貳拾五錢

合計売買見積価格三百三拾四円五錢

外

一、建物 三棟

明治廿七年度酒造營業免許ノ義出願候ニ付、現今所有ノ不動産取調候処、前記ノ通相違無之候也

明治廿七年九月廿六日

下総国海上郡本銚子町貳百四拾九番地

石 上 新 藤

千葉県知事 兵 頭 正 懿殿

(史料二三「明治廿七年度酒造營業下書」より)

史料二四

(明治二九年九月 造酒見込種目並石数申告書) (控)

造酒見込種目並石数申告書

下総国海上郡本銚子町

貳百四拾九番地

酒 造 場

一、清酒二百五拾壺石七斗壺升五合

此白米百八拾壺石式斗

酒母三拾個

但別紙製造方法イ号拾五仕込

但同上 イ号酒母三十個

一、濁酒七拾式石壺斗五升六合

此白米四拾四石式斗四升

酒母拾四個

但別紙製造方法イ号式十八仕込

但同上 イ号酒母拾四個

一、焼酎拾五石壺斗四升六合

此酒粕千四百拾貫

醪式拾式石三斗壺升八合

但別紙蒸留方法イ号百四十壺釜

但同上 イ壺仕込 イ号酒母壺個

ロ式仕込 ロ号同 式個

一、味醂五石九斗壺升三合

此白米壺石八斗

焼酎五石四斗

但別紙製造方法イ号三仕込

一、白酒四石八斗

此白米四石

清酒式石

右ハ明治廿九年度造酒見込石数前書ノ通ニ有之候也

明治廿九年九月卅日

下総国海上郡本銃子町式百四拾九番地

酒類製造人 石 上 新 藤

千葉県知事 阿 部

浩殿

(史料二四「酒類製造免許申請書」より)

史料二五

(大正八年二月 石上藤樹宛大阪住吉撰津酒造合資会社永井広造書簡)

大正八年二月二四日

拝啓 昨日ハ久々にて先の御書状ニ接し欣喜罷在候

御来宛ニ付左記御回答申上候

一、焼酎容器ハブリキ缶、又ハ其他のものにてハ如何との御究葉ニ候も、当所ニ於てハ北海道あたり迄も之にて送付罷在候次第に付、矢張り壺にて願度事

一、味醂相場 中味百二十五円

一斗壺入なれば拾三円五十五銭との事

一、見本ハ色々御送付申上候間、篤と御機嫌の上にて沢山御代手入之極

一、当社新日本酒ハ全然混成あらず、今年ハ御減醸に付二百四五十石位しか醸造不仕、之も瓶詰にして直接需要毎ニ供給すべきやの事ニ付、目下協義申候

但し新日本酒とハ申せ從來之坪井式のものにあらざる事ハ確なるところ

新日本酒 酒銘 新春 価格 未定

但し品ハ從來之日本酒と何も相違無之候

一、焼酎価格

再度当方販賣済より御饗申上候通、当地方の価格実には暴騰と申すの外無之、一度当り二十八銭位ニ相成居り、昨年の二十一二銭之頃と到底ニ比較ニ相成らぬ位ニ御座候

又粕取混和品(A)も自然高値と相成居り候、芋取焼酎(B)二十七八銭位

致し候ても仲々の売行、到底製造か注文ニ応じ切れぬ位ニ御座候、如何なる

原因にや、一寸気味悪く感せられ候程ニ候

濁酒之売行成ニ御座候由、之も酒の高きニ起因するものと存せられ候

ウキスキー最高百三十円位(石)と存じ候

ブランドーも同価値

安物も有之、之もなか／＼よく売行申候

バー式の小売店を御開店相成候御趣面白き試みと存ぜられ候

澱粉粕ハ安くても鬼面之面少く当所にて生薯切干等の全然無之時ニ併

用致候位に下 御注文ハその所見見合せ申すべく候

又スターチ五十―六十俵とハ一寸信じられぬ事ニ御座なくや、通常の芋にて六十俵位のものに候ニ、それよりS.E.H.T.を取り去れ、事済候へばなかゝそんなニ含まれ居ると思はれず、いや貴兄を胃潰せる罪不軽、早々御免を願候よし

陽気もボカゝと致し候頃関西ニ赤毛布ならぬ赤毛布を曝し候も一寸乙ニ候何処にでもおつき合可申候

とハ云ひながら一日・十五日のみ休日とハアラ哀しや、なさけなや

先頃満感ニ御かゝりなされ候由、何処までたゝり候ものか、東京地方目下大満行之由、当地方ハ殆んど無之候

左崎・荒川とも時ニ御逢ひなされ候事と存じ候、当方にて先日高阪ニ逢ひ申候、スツカリ技師と相成居り候、なかゝ苦しき奉話ニ候、佐むハ堺の生烏醬油醸造所を辞せる由、その後の報ニ不接

最後ニ生も「」再拜の日を待居候

(サイン)

石 上 藤 樹 様

史料二六

〔大正一〇年九月 銚子瓦斯株式会社石上新藤宛三井物産株式会社書簡〕

大正十年九月十二日

東京市日本橋区本町貳丁目壹番地

三井物産株式会社

石炭部

地方販売掛

銚子町

石 上 新 藤 殿

拝啓 弥々御隆昌奉賀候

諏訪塊炭積出之事

十一日附貴状拝見予之御下命に預り候諏訪塊炭急送方御来示相承候も、実は迅々に積出済之事とのみ存候処、未だニ未着之趣意外に存候、早速受渡掛へ問合せ候処、武内回漕店より回船無之為め、其俣と相成候由に付、重ねて至急積取方同回漕店へ交渉為致置候間、不日落着之事と相成可申、左様御涼承願上候

不取敢御返事^者如斯に御座候

敬具

前野家文書 (銚子市港町前野勇氏所蔵)

史料二七

〔安政三年六月 借地証文〕

借地証文之事

一、今般貴殿西浜町ニ而御所持之地面壹ヶ所我等請人加判ヲ以借地仕候処相違無御座候、尤も地代金壹ヶ年金壹両貳百文に相定メ七月極月兩度無相違急度差上可申候、若又地代金相滞候得ハ加判我等弁金致し、貴殿^江御損毛御苦勞相掛申間敷候、猶又地面御入用之節何時何成共早速明渡可申候、為後日入置一札仍而如件

安政三年辰六月

借地主 長 五 郎[㊦]

証人 利左衛門[㊦]

源 五 郎 殿

史料二八

〔安政七年二月 流地証文〕

流地証文之事

宝曆改前塚

一、林畑 三十間四尺貳寸・貳十間 貳反四歩貳五 木生附 老ヶ所

分米五斗壹升壹合八勺八才

貞享五辰改

一、屋敷 間口三間半・奥行八間

分米五升九合貳勺四才壹

壹ヶ所

△

右^著我等只今迄所持來候處、此度勝手合を以書面之地所貴殿^江 流地相渡、金子五拾五兩左之加判人立会之上只今不殘礎ニ請取申候處実正也、右地所二付、外々々故障等決^而無御座候、万一六ヶ敷儀出來仕候ハ、加判之我々何方迄も罷出早速埒明、貴殿^江 少しも御苦勞相懸申間敷候、為後之流地証文依^而如件

安政七庚

下総国海上郡飯沼村

申二月

流地渡主

市郎兵衛^印

親類惣代

権兵衛^印

五人組惣代

太吉^印

立会人

新八

喜多村

藤藏殿

水神宮所在石碑（銚子市竹町）

史料二九

（明治二十三年六月 水神宮碑銘）

大伝間若者連名

水神宮

名島文治郎
秩父万次郎
伊藤寅松
田原喜七
浜田与七
徳島長吉
塚口丑造
篠塚音松
八木文之助
猪田徳次郎
伊藤丑助
加瀬新松
坂田良之助

明治二十三年庚寅年六月

〈裏面〉

刻字人

文竜

山本林之丞

（松杉力修・山澤 学・渡辺康代・山下琢巳）